地質学雑誌　第126巻　第9号（通巻1500号）付録　令和2年9月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.23 No.9 September 2020

一般社団法人日本地質学会
The Geological Society of Japan

理 事

任期：2020 年 5 月 23 日～ 2022 年総会

会長（代表理事） 磯﨑行雄（東京大学）

副会長 佐々木 和彦（応用地質（株））
平田大二（神奈川県立生命の星・地球博）

常務理事 中澤　努（産業技術総合研究所）
副常務理事 岡田　誠（茨城大学）
執行理事 ウォリス サイモン（東京大学）
緒方信一（中央開発（株））
大藤　茂（富山大学）
狩野彰宏（東京大学）
亀高正男（(株) ダイヤコンサルタント）
小宮　剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森　樹（東北大学）
星　博幸（愛知教育大）
松田達生（工学気象研究所）
矢部　淳（国立科学博）

理　事 上松佐知子（筑波大学）
芦　寿一郎（東京大学）
天野一男（東京大学）
安藤寿男（茨城大学）
内野隆之（産総研）
尾上哲治（九州大学）
笠間友博（箱根ジオミュージアム）
亀尾浩司（千葉大学）
亀田　純（北海道大学）
川端清司（大阪市立自然史博）
北村有迅（鹿児島大学）
清川昌一（九州大学）
後藤和久（東京大学）
小松原純子（産総研）
齋藤　眞（産総研）
杉田律子（科学警察研）
竹下　徹（北海道大学）
内藤一樹（産総研）
納谷友規（産総研）
奈良正和（高知大学）
西　弘嗣（東北大学）
根本直樹（弘前大学）
野田　篤（産総研）
早坂康隆（広島大学）
藤井正博（応用地質（株））
細矢卓志（中央開発（株））
保柳康一（信州大学）
松田博貴（熊本大学）
三田村宗樹（大阪市大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（日本大学）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研）

監 事

任期：2020 年 5 月 23 日～ 2024 年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）

一般社団法人日本地質学会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町 2-8-15　井桁ビル
電話　03-5823-1150　FAX　03-5823-1156（振替口座　00140-8-28067）
e-mail: main@geosociety.jp　ホームページ htttp://geosociety.jp

日本地質学会*News*

Vol.23 No.9 September 2020

The Geological Society of Japan *News*
一般社団法人日本地質学会
〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15　井桁ビル ６F
編集委員長　小宮　剛
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

2021年度一般社団法人日本地質学会各賞候補者募集について……2
各賞選考規則/選考委員会規則

2020年名古屋大会代替企画：まだまだ企画進行中！……5

CALENDAR……7

公募……8
山梨県富士山科学研究所任期付研究員の募集/弘前大学教育研究院自然科学系安全システム工学領域（自然災害科学分野，理工学研究科）教員公募/新潟大学自然科学系地球惑星科学分野助教1名（女性限定・任期なし）公募/愛媛大学大学院理工学研究科 地球進化学講座・助教（女性限定・テニュアトラック）の公募

各賞・研究助成……9
笹川科学研究助成募集/2021年度山田科学振興財団海外研究援助

会員の声……10
深海地形調査技術と南海トロフ・日本海溝のジオダイナミクスの先駆者，トム・ヒルデ教授を偲ぶ（小川勇二郎・岸本清行）

追悼……11
名誉会員　諏訪兼位先生を偲ぶ（三宅　明）
名誉会員　高柳洋吉先生のご逝去を悼む (長谷川四郎)
名誉会員　斎藤常正さんを偲ぶ（新妻信明）

学会記事……15
2020年度第3回執行理事会議事録

表紙紹介……16
第11回惑星地球フォトコンテスト入選作品「混成の美」（辻森　樹）

事務局営業カレンダー　営業時間：9:30から18:00まで

9月 September

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

10月 October

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

お休み

印刷・製本：日本印刷株式会社　東京都豊島区東池袋4－41－24

2021 年度一般社団法人日本地質学会各賞候補者募集について

日本地質学会では今年も運営規則第 16 条および各賞選考規則（本号別途掲載）にしたがい，下記の賞の候補者を募集いたします．ご応募いただいた方の中から，各賞選考委員会（委員は理事会の互選と職責により選出）が候補者を選考し，理事会での決定，総会での承認を経て表彰を行います．

論文賞・研究奨励賞の対象論文リストについては，地質学会のホームページ（http://www.geosociety.jp/）をご覧いただくか，または，学会事務局までお問い合わせください．

下記の応募要項をご参照の上，各賞選考委員会（学会事務局）あてに，期日厳守にてご応募下さい．たくさんのご応募をお待ちしております．郵送，e-mail 送信いずれでも受け付けますが，なるべく電子ファイルでの提出をお願いします．なお，ご応募いただいた場合には，必ず受け取りのお返事をお出ししますのでご確認ください．

応募の締め切りは各賞とも，2020 年 12 月 1 日（火）必着です．
所定の様式による，とあるものは事務局にご請求下さい．

送付先：〒 101-0032　東京都千代田区岩本町 2-8-15　井桁ビル 6 F
一般社団法人日本地質学会各賞選考委員会
TEL：03-5823-1150，e-mail：main@geosociety.jp

1．日本地質学会賞

授賞対象：地質学に関する優秀な業績をおさめた本会正会員もしくは名誉会員，またはこれらの会員を代表とするグループ．

応募方法：正会員，名誉会員，支部，および専門部会による推薦（自薦も可）．所定の様式による．

2．日本地質学会国際賞

授賞対象：地質学に関する画期的な貢献があり，加えて日本列島周辺域の研究や日本の地質研究者との共同研究などを通じた日本の地質学の発展に関する顕著な功績があった正会員および非会員．

応募方法：正会員，名誉会員，支部，および専門部会が推薦．所定の様式による．

3．日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞

授賞対象：地質学に関して優れた業績を上げた，2020 年 9 月末日で満 37 歳以下の正会員（研究テーマによって小澤儀明賞・柵山雅則賞のいずれかを授与）．

応募方法：正会員，名誉会員，および専門部会による推薦（自薦も可）．所定の様式による．

4．日本地質学会研究奨励賞

授賞対象：2018 年 10 月から 2020 年 9 月までの過去 2 年間に「地質学雑誌」および「Island Arc」に優れた論文を発表した著者．2020 年 9 月末日で満 35 才未満の正会員．筆頭著者であれば共著でもよい．

応募方法：推薦理由書添付（400 字程度）．正会員・名誉会員および専門部会であればどなたでも推薦ができます．

5．日本地質学会論文賞

授賞対象：

1）2017 年 10 月から 2020 年 9 月までの過去 3 年間に「地質学雑誌」に発表された優れた論文．

2）2017 年 6 号から 2020 年 9 月までの過去 3 年間に「Island Arc」に発表された筆頭著者が本会会員による優れた論文．

応募方法：推薦理由書添付（400 字程度）．正会員・名誉会員および専門部会であればどなたでも推薦ができます．

6．日本地質学会小藤文次郎賞

授賞対象：2018 年 10 月から 2020 年 9 月までの間に重要な発見または独創的な発想を含む論文を発表した会員．

応募方法：推薦理由書（400 字程度）．正会員・名誉会員および専門部会であればどなたでも推薦ができます．地質学雑誌・Island Arc 誌以外で発表された論文は PDF によるコピーを添付して下さい．

7．日本地質学会功労賞

授賞対象：長年にわたり地質学の発展に貢献のあった本会正会員もしくは非会員．またはこれらを代表するグループ．

応募方法：正会員・名誉会員，支部，または専門部会が推薦．所定の様式による．

8．日本地質学会表彰

授賞対象：地質学の教育活動，普及・出版活動，新発見および露頭保全，あるいは新しい機器やシステム等の開発等を通して地質学界に貢献のあった個人，団体および法人．対象者は会員・非会員を問いません．

応募方法：正会員・名誉会員，支部，または専門部会が推薦．所定の様式による．

注）日本地質学会賞・国際賞・研究奨励賞・小澤儀明賞・柵山雅則賞の受賞候補者は，過去においてそれぞれの賞を受けていないことが要件となります．

2020 年 9 月

一般社団法人日本地質学会
各賞選考委員会　委員長　竹下　徹
委員　岩森　光・大藤　茂・尾上哲治・狩野彰宏・川端清司・後藤和久・小宮　剛・田村芳彦・辻森　樹・中澤　努・西　弘嗣・野田　篤・早坂康隆・細矢卓志・道林克禎・武藤鉄司・矢部　淳・山路　敦

（関連資料）

一般社団法人日本地質学会各賞選考規則

（目的）

1．本規則は，一般社団法人日本地質学会（以下地質学会という）運営規則第16条3項に基づき地質学会の各賞選考に関する手続きを定める．

（選考）

2．各賞の選考は，理事会のもとにおかれる各賞選考委員会が行う．各賞選考委員会については別途定める．

（各賞の受賞対象および応募資格等）

3．日本地質学会賞の応募に関する細目は次のとおりとする．
　1）応募資格：正会員，名誉会員，ならびに前記のものを代表とするグループ．ただし，過去において本賞を受けていない者．
　2）応募方法：正会員，名誉会員，支部および専門部会による推薦，自薦も可とする．所定の様式による．

4．日本地質学会国際賞の応募に関する細目は次のとおりとする．
　1）応募資格：正会員および非会員．ただし，過去において本賞を受けていない者．
　2）応募方法：正会員，名誉会員，支部および専門部会による推薦．所定の様式による．
　3）国際賞の授与は毎年度1名以内とする．

5．日本地質学会Island　Arc賞の授賞対象は次のとおりとする．
　1）募集開始年の3年前と2年前にIsland Arc誌に発表された論文．

6．日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞の応募に関する細目は次のとおりとする．
　1）応募資格：募集開始年の9月末日で満37歳以下の正会員．ただし，過去において本賞を受けていない者．
　2）応募方法：正会員，名誉会員および専門部会による推薦．自薦も可とする．所定の様式による．
　3）賞の名称は，受賞する研究のテーマによって各賞選考委員会が定める．

7．日本地質学会論文賞の受賞対象は次のとおりとする．
　1）募集開始年9月までの過去3年間に地質学雑誌に発表された論文．
　2）募集開始年9月までの過去3年間にIsland Arcに発表された，筆頭者が地質学会会員による論文．
　3）応募方法：正会員および名誉会員，専門部会による推薦．400字程度の推薦文を添付すること．

8．日本地質学会小藤文次郎賞の受賞対象は次のとおりとする．
　1）募集開始年9月までの過去2年間に重要な発見または独創的な発想を含む論文．
　2）応募方法：正会員および名誉会員，専門部会による推薦．400字程度の推薦文を添付すること．

9．日本地質学会研究奨励賞の受賞対象および資格者は次のとおりとする．
　1）募集開始年9月までの過去2年間に地質学雑誌およびIsland Arcに発表された論文の著者．ただし，過去において本賞を受けていない者．
　2）募集開始年9月末日で満35才未満の会員．筆頭著者であれば共著でもよい．
　3）応募方法：正会員および名誉会員，専門部会による推薦．400字程度の推薦文を添付すること．

10．日本地質学会優秀ポスター賞の受賞候補者の応募および選考に関する細目は次のとおりとする．
　1）応募対象：各賞選考委員会が対象と定める講演会において発表されたポスター講演の発表者またはこれらを代表するグループ．

11．日本地質学会功労賞の受賞候補者の応募に関する細目は次のとおりとする．
　1）応募対象：地質学会正会員および非会員，またはこれらを代表するグループ．
　2）応募方法：正会員，名誉会員，支部または専門部会による推薦，所定の様式による．

12．日本地質学会表彰の応募に関する細目は次のとおりとする．
　1）応募対象:会員および非会員の個人,団体または機関．
　2）応募方法：正会員，名誉会員，支部または専門部会による推薦，所定の様式による．

（応募に関する告示）

13．各賞の応募に関する告示は，応募締め切り期日の3カ月前までにNews誌，Webサイト等で行う．

（選考結果の記録と報告）

14．各賞選考委員会は，選考過程と選考結果について文書で理事会に報告する．

（規則の変更）

15．本規則の変更は理事会の議決による．

附則

本規則は，2009年9月3日から施行する．
2011年4月2日，一部改正．
2012年4月7日，　〃
2013年5月18日，　〃

一般社団法人日本地質学会各賞選考委員会規則

（目的）

1．一般社団法人日本地質学会（以下地質学会という）各賞選考規則第2項に基づき，本規則を定める．

（委員の構成および選出）

2．各賞選考委員会（以下選考委員会という）は，理事会が推薦する10名の委員と前・現地質学雑誌編集委員長および前・現副委員長，Island Arc前・現編集委員長で構成する．
　1）理事会推薦委員の10名は，専門を考慮して理事の互選により選出し，委員長はこの委員間の互選とする．
　2）理事会推薦委員の任期は2年とする．

（選考検討委員会等の設置）

3．選考委員会は，日本地質学会賞，日本地質学会国際賞，日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞ならびに日本地質学会Island Arc賞の選考に関しては，選考委員会のもとに随時，選考検討委員会を設置して諮問することができる．

4．日本地質学会賞，日本地質学会国際賞ならびに日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞の選考を行う選考検討委

員会は，前・現地質学会長，および過去の日本地質学会賞受賞者から専門を考慮して執行理事会が推薦する８名程度の委員で構成し，必要に応じて執行理事会が推薦する若干名の委員を追加することができる．委員長は委員間の互選とする．

5．日本地質学会 Island Arc 賞の選考検討委員会は，現 Island Arc 編集委員長と Editorial Advisory Board のメンバー若干名によって構成し，委員長は委員間の互選とする．

6．選考委員会は，優秀ポスター賞の選考に関して，随時，優秀ポスター賞選考委員を任命し，その意見を選考の参考にすることができる．

（利益相反）

7．選考委員会委員ならびに選考検討委員会委員が受賞候補対象者となった場合，または委員と候補者の関係が深い（親族，共同研究者，研究指導者など）と判断される場合は，地質学会利益相反防止規則に基づいて，該当する賞の選考には一切関与しないこととする．これによって減数した委員の補充は行わない．

附則

(1) 本規則の変更は理事会の議決による．

(2) 本規則は，2009 年 9 月 3 日から施行する．

(3) 2011 年 4 月 2 日，一部改正．2020 年 9 月 12 日一部改正

2020年名古屋大会代替企画

- オンライン各賞表彰・受賞記念講演会
- 第1・2回ショートコース
- コロナ禍での地質学教育に関するサイバーシンポジウム
- 日本地質学会ジュニアセッション（旧小さなEarth Scientistのつどい）
- JABEEオンラインシンポジウム：2021年2月末～3月上旬開催予定
- 若手会員のための地質関連企業の研究サポート：地質系のキャリア情報誌を刊行し各大学地質学系教室に配布予定．　ほか

2020年度日本地質学会オンライン：名誉会員証授与･永年会員顕彰ならびに各賞受賞式・受賞記念講演会

2020年9月13日（日）にライブ配信を行いました。当日の内容は，一定期間YouTubeで限定公開しています。

コロナ禍での地質学教育に関するサイバーシンポジウム

コロナ禍での地質学教育に関する情報交換・共有を目的としたサイバーシンポジウムを開催します．現在の困難な状況で，学校（大学，高等学校等）や博物館・科学館，ジオパークなどでは，教員や学芸員らがそれぞれのできる範囲で苦心して教育・普及活動を進めています．それぞれの実施事例やアイディアを共有できれば，今後しばらく続くと予想される困難な状況でも教育・普及活動の質の向上あるいは低下抑制が期待できます．大学や高校での授業（実験や野外実習を含む），卒業研究や修士研究，博物館やジオパークでの教育普及活動などをどのように工夫して進めているかについて情報交換・情報共有する場を提供します．地質学に限らず，野外活動（フィールドワーク）や実験・実習を伴う分野の皆様にも広く参加していただきたいと思います．

日本地質学会行事委員会
委員長 星 博幸

開催日時：**2020年9月27日（日）**9:30-12:15（予定）
開催方法：**YouTubeライブ配信**・どなたでも視聴可能・参加費無料．事前申込不要
※シンポ終了後，シンポの内容を一定期間YouTubeで公開予定です。

<u>プログラム</u>
9:30　開会
9:35～10:35**＜大学の取り組み＞**
1. 地球惑星環境学科（東京大学）の取り組み（後藤和久：東京大学大学院理学系研究科）
2. 地球科学系講義科目のオンライン化実践：オンデマンド配信用動画作成における気づきを中心として（乾　睦子：国士舘大学理工学部）
3. コロナ渦における地学系実験・実習の実施：茨城大学理学部における事例紹介（岡田　誠：茨城大学理学部）
4. 前期をほぼ無傷で終了した山口大学の例（坂口有人：山口大学）
10:45～11:15**＜中高の取り組み＞**
5. オンライン学習の軌跡：試行錯誤の現状と今後の課題（渡来めぐみ：茗溪学園中学校高等学校）
6. 高校における地学教員としての課題と地質学教育の実践例（松永　豪：大阪府立泉北高等学校）
11:20～11:50**＜博物館・ジオパークの取り組み＞**
7. 学校休校と臨時休館をきっかけにうまれた「おうちミュージアム」とは（渋谷美月：北海道博物館・北海道大学大学院環境科学院環境起学専攻）
8. オンラインでの野外地質見学ツアーの試みについて（白井孝明：萩ジオパーク）
11:50～12:15**＜ライブ総合討論＞**
12:15　閉会

備考：11月下旬または12月上旬に第２回シンポジウムを開催予定です．詳細は学会HPに掲載します．

第18回日本地質学会ジュニアセッション～小・中・高校生徒「地学研究」発表会～

日本地質学会地学教育委員会は，地学普及行事の一環として，地学教育の普及と振興を図ることを目的として，学校における地学研究を紹介する地学研究発表会をおこなっています．昨年までは「小さなEarth Scientistのつどい」と題しておりましたが，今年より「日本地質学会ジュニアセッション」に名称が変わりました．今年の地質学会学術大会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期となりましたが，日本地質学会ジュニアセッションは開催します．今回は開催地やコアタイムは無く，送付されたポスターの審査のみとなりますので，ご了承ください．

この会を通じて児童・生徒の日頃の研究成果を披露していただき，専門家からのコメントやアドバイスを受けて地質学や地球惑星科学への理解が深まり，未来を担う児童・生徒の学習意欲への良い刺激と励みになることを願っております．なお，優秀な発表に対しては日本地質学会ジュニアセッション優秀賞などの賞を授与いたします．またポスター毎に評価・コメント作成し後日お送りします．

参加対象：
・小・中・高校地学クラブならびに理科クラブ等の活動成果の発表
・小・中・高校の授業における研究成果の発表
・小・中・高の児童・生徒による自発的な個人研究発表
・活動，研究内容が地学的なもの（地質や気象などの地球科学・環境科学，天文など）

ポスターおよび参加申込書の締切：2020年9月30日（水）
デジタル審査の方法：学会理事が評価コメントを作成します．それらのコメントも含めて審査委員が採点・評価した後，地学教育委員会が審査結果を集計し，10月末頃までに審査結果と各ポスターに対するコメント・評価等をお送りします．
問い合わせ・申込先：
日本地質学会地学教育委員会（担当 三次）

2020代替企画

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F
TEL：03-5823-1150　　FAX：03-5823-1156
e-mail：main@geosociety.jp

ショートコース

本年秋の学術大会が新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止（来年に順延）になったことを受け，その代替企画について執行理事会が中心となって検討してきました．その結果，代替企画の一つとして「日本地質学会ショートコース」を開催することになりました．検討を進める中で，大学の地球惑星科学系学科では地質学の基礎的内容でありながら学科構成スタッフの偏りのために学部生や大学院生に十分教えられていないトピックがあり，そうした内容を本学会が少しでもカヴァーできないかという意見がありました．また，地質技術者や学校教員，学芸員等が現在の地質学の知見や研究方法等について学ぶ機会があると良いという意見もありました．こうした意見を踏まえて，地質学の土台を支える基礎知識や最近ホットな研究の話題など，会員・非会員を問わず多くの方々に知っていただきたいトピックを「日本地質学会ショートコース」で紹介することになりました．本年9月19日（土）に第1回目を，10月24日（土）に第2回目をオンラインで開催し，各回2名の研究者に話題提供していただきます（午前1名，午後1名）．その道の精鋭によるコースをぜひこの機会に受講していただきたいと思います．

2020年7月11日
日本地質学会行事委員会
委員長 星 博幸

第１回：2020年9月19日（土）：終了しました．

内容：（各コース、講義、質疑応答を含め3時間程度を予定）

＜午前＞ 東北アジア及び日本列島の地体構造発達史：辻森 樹（東北大学）
https://researchmap.jp/tatsukix

＜午後＞ 大陸成長から見るたのしい太古代研究：沢田 輝（海洋研究開発機構）
https://researchmap.jp/hsawada

第２回：2020年10月24日（土）

内容：（各コース、講義、質疑応答を含め3時間程度を予定）

＜午前＞ 層序学の基礎と応用：高嶋礼詩（東北大学）
https://researchmap.jp/read0155080

本コースでは層序学の基礎編として，岩相層序，生層序，古地磁気層序，化学層序（酸素，炭素，ストロンチウム，オスミウム同位体比層序），サイクル層序，年代層序の概要を解説します．そしてこれらの層序学的手法を用いた国際標準年代尺度の作成，GSSPの認定，日本の地層での研究例を紹介します．応用編では，アパタイト微量元素組成を用いたオルドビス紀～第四紀のテフラ層序の研究を紹介します．この手法を用いると，埋没続成，溶結，風化などによって火山ガラスが変質した凝灰岩についても高精度で対比可能になります．日本には変質した凝灰岩の露出が卓越する地域がよくみられることから，ジルコン年代と組み合わせることにより，日本の地層の対比精度向上への貢献が期待できます．

＜午後＞ 統計解析言語Rを用いた地球科学データ解析基礎実習：上木賢太（海洋研究開発機構）
https://researchmap.jp/kentaueki

多変量解析や数理に基づくデータ解析は，地球科学においても年々その重要さを増しています．本講座では，実際の地球科学データを題材として，データ解析の実習を行います．講義として，多変量解析や線形回帰，モデル選択などの概念を解説するとともに，地球科学，特に岩石化学組成へ適用した研究の例を示します．さらに実習として，統計解析向けの言語及び実行環境フリーソフトウェアである「R」を用いて，基礎的な解析を各自のパソコン環境上で実際に行います．通常のパソコン環境が整っていれば問題なく実習を行うことが可能です．必要な事前準備（RおよびR studioのインストール）のための資料や，実習で使用するデータ等は事前に配布します．

参加費（各1日券）
会　員 2000円（賛助会員に所属する方は会員と同額）
非会員 4000円
（注）非会員の学部生・院生は「会員」料金に含まれます．「非会員」とは学部生・院生ではない非会員とします．
（注）午前のみ，午後のみの受講の場合も，参加費の割引はありません．
定員：各コース100名（定員は事務局および講師を含み、定員を超えた場合は，会員が優先となります）
申込方法：学会ホームページの専用申込画面よりお申込みください．
その他：希望者には各コース毎のCPD受講証明書を発行します。
申込受付期間：第2回分 9月24日（木）～10月12日（月）

問い合わせ先：一般社団法人日本地質学会
メール main@geosociety.jp　電話 03-5823-1150

構造地質部会2020年度オンライン例会

新型コロナウイルス対策のために学術研究発表もその多くが中止・延期となっています．これに伴い，地球科学に携わる学生や若手研究者の研究発表の機会が制限されることが懸念されています．研究開始から間もなく研究業績が求められる学生や若手研究者にとって，学術大会は重要な研究発表の場であるため，学会の中止・延期により各々の業績に「年度間の不公平」が生まれかねません．この状況を鑑み，構造地質部会では学生や若手研究者の発表の機会を設けるべくオンライン会議ツールを使用した学術大会を開催します．

会期：2020年10月7日（水）～9日（金）1日3時間程度を想定．発表者数により変動．
予稿投稿締切：9月28日（月）
参加登録締切：10月2日（金）
詳しくは，http://struct.geosociety.jp/activity.html

2020代替企画

第20回日本地質学会四国支部総会・講演会

コロナ禍のため，Webになる可能性が高いと思われます．その場合，総会および口頭発表はZoom，ポスター発表は，愛媛大学理学部地学コースのサーバーにポスターを掲載（要パスワード）する形式を考えています．

対面にするかWebにするのかは，10月末までに決定します．

Web開催になった場合でも，CPD単位は出せる予定です．

詳しくは学会HPの情報を注視して下さい．

会期：2020年12月5日（土）13:00〜17:30
開催様式：WEBまたは対面（対面開催の場合は愛媛大学理学部を会場とする）

※このほかの支部、専門部会でも現在企画を検討中です．詳細が決まりましたら，ニュース誌，HP，メルマガでお知らせします．

CALENDAR

2020.10〜

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
★印は学会主催，（共）共催，（後）後援，（協）協賛．

2020年

10月　October

○ぼうさいこくたい2020（WEB）ー「みんなで減災」助け合いをひろげんさいー
10月3日（土）
http://bosai-kokutai.jp/

★［代替企画］日本地質学会構造地質部会2020年度オンライン例会
10月7日（水）〜9日（金）
参加登録締切：10月2日（金）
参加料無料
http://struct.geosociety.jp/activity.html

○日本火山学会2020年度秋季大会（WEB）
10月8日（木）〜10日(土)
http://www.kazan.or.jp/J/index.html

○地区防災計画学会シンポジウム（第35回研究会）
「ウィズコロナ時代のコミュニティ防災」
10月10日（土）13:00〜15:30（予定）
オンライン開催（YouTubeによるライブ配信等）
主催：地区防災計画学会
対象：地域防災力の強化や地区防災計画づくりに興味のある方
参加費無料
https://gakkai.chiku-bousai.jp/

★［代替企画］日本地質学会第2回ショートコース（WEB）
10月24日（土）
・層序学の基礎と応用：高嶋礼詩（東北大学）
・統計解析言語Rを用いた地球科学データ解析基礎実習：上木賢太（JAMSTEC）
申込受付締切：10月12日（月）
http://www.geosociety.jp/science/content0121.html

○2020年度第2回（経験者向け）地質調査研修
10月26日（月）〜30日（金）
主催：産総研コンソーシアム
場所：島根県出雲市長尾鼻周辺（小伊津海岸）
https://www.gsj.jp/geoschool/geotraining/2020-2.html

○日本地震学会2020年度秋季大会（WEB）
10月29日（木）〜31日（土）
https://www.zisin.or.jp/

11月　Nobember

○第74回日本人類学会大会（WEB）
11月1日（日）〜11月3日（火・祝）
http://anthrop-meeting.sakura.ne.jp/

○日本堆積学会2020年オンライン大会
11月7日（土），14日（土）：特別講演・個人講演，懇親会
（発表者が少ない場合には11月14日のみとなる場合があります）
参加費：一般会員，学生会員，非会員一般，非会員学生 すべて無料
大会参加申込締切：11月6日（金）正午
http://www.sediment.jp/04nennkai/2020/2020online_annai.html

○（共）日本地球化学会第67回オンライン年会
11月12日（木）〜26日（木）WEB上での発表資料に対する議論
11月19日（木）〜21日（土）Zoomでのセッション企画
（注）地質学会員は地球化学会員と同じ参加費（一般：2000円／学生：無料）で参加できます．
参加申込締切：11月4日（水）17時
https://www.geochem-conf.jp/

（協）第36回ゼオライト研究発表会
11月19日（木）〜20日（金）
場所：富山国際会議場
https://jza-online.org/events

○第30回環境地質学シンポジウム
11月27日（金）〜28日（土）
［オンライン開催］（Zoomミーティング使用予定）
https://www.jspmug.org/envgeo_sympo/30th_sympo/30th_sympo.html

12月　December

○地質学史懇話会
12月25日（金）13:30より
会場：北とぴあ　701号室（東京都北区王子）
志岐常正：戦後京大地質学教室史-その虚像と実像
矢島道子：『地質学者ナウマン伝』を上梓して
問い合わせ先：矢島 pxi02070@nifty.com

注意：新型コロナウィルス感染拡大の影響により，行事中止の可能性もあります．実際の行事開催の有無については事前に各主催者，問い合わせ先にご確認ください．

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

山梨県富士山科学研究所 任期付研究員の募集

山梨県では、令和2年度 山梨県職員（任期付研究員）の 選考採用試験を実施します．
詳細は、下記ホームページをご覧ください
職種：任期付研究員　1名
分野：下記のうちいずれかの分野
・火山防災1： 富士山の火山防災に資する地球物理学的観測および観 測データを用いた研究
・火山防災2： 富士山の岩石学および地質学に関する研究
・火山防災3： 自然災害等の防災に関する研究
応募締切：令和2年10月16日（金）午後5時まで（郵送の場合：10月16日消印有効）
詳　細：https://www.pref.yamanashi.jp/shinchaku/fujisanlb/2020/shokuinsaiyou.html

弘前大学教育研究院自然科学系 安全システム工学領域（自然災害科学分野，理工学研究科）教員公募

募集職種・人員：助教1名
任期：任期なし
所属：教育研究院自然科学系 安全システム工学領域（専任担当組織：理工学研究科（理工学部地球環境防災学科併任））
専門分野：自然災害科学分野
担当科目：
・理工学部（自然災害学概論，空間情報学演習，基礎物理学実験ほか，地球環境防災学科における専門科目および大学院の科目など）
・大学院理工学研究科（専門分野に関連した科目，研究指導に関連した科目など）
・教養教育科目（スタディスキル導入科目，自然・科学科目群など）
採用予定時期：令和３年１月１日（以降のできるだけ早い時期）
応募資格：次の要件をすべて満たす者
(1) 博士の学位を有する方（着任までに取得見込みの方）
(2) 大学院博士前期課程において教育研究指導ができる方
(3) 外国人の場合には，研究指導と学内外の諸業務の遂行が可能な日本語運用能力を有する方
応募期限：令和２年10月16日（金）（消印有効）
問い合わせ 先 〒036-8561 青森県弘前市文京町３番地
弘前大学大学院理工学研究科 総務グループ（総務担当）
電話：(0172)39-3503，FAX：(0172)39-3513，
E-mail: jm3505@hirosaki-u.ac.jp
応募賞類，選考方法等公募の詳細はWEBサイトをご参照ください．
https://www.hirosaki-u.ac.jp/information/published/employment_information.html

新潟大学自然科学系 地球惑星科学分野助教1名（女性限定・任期なし）公募

地球惑星科学およびその関連分野，環境解析評価およびその関連分野，環境保全対策およびその関連分野（特に自然災害や環境動態に関わる気象学，海洋学，陸水学，地形学，地質学，地震学，火山学など）を専門として，本学理学部教員と連携して研究を進めて頂きます．また，本学災害・復興科学研究所，佐渡自然共生科学センター，農学部のいずれかと連携して，「災害や環境変化に強い地域社会構築」に向けた情報の社会発信にも積極的に取り組んで頂きます．
教育に関しては，理学部理学科（自然環境科学プログラム，地質学プログラム，フィールド科学人材育成プログラムのうち１プログラム以上），大学院自然科学研究科環境科学専攻（自然システム科学コース，地球科学コース，フィールド科学コース（開設予定）のうち１コース以上）を担当して頂きます．
応募期限：2020年10月20日（火）17時必着
着任時期：2021年4月1日以降のできるだけ早い時期
なお，本公募は新潟大学若手教員スイングバイ・プログラム（若手教員一括採用育成制度）によるもので，採用後には，専門分野を高めると同時に既存分野を超えた新たな展開に挑戦できるような若手教員育成支援を用意しています．
詳細は下記をご覧ください．
https://www.niigata-u.ac.jp/information/2020/76465/
https://www.niigata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/08/sc_20201020.pdf

東京大学地震研究所 2021年度客員教員の公募

公募人員：客員教員 若干名
期　間：2021年4月1日～2022年3月31日（1年間）
申込資格：国・公立大学法人，私立大学及び国，公立研究機関の教授もしくは准教授又はこれに準ずる研究者
研究分野：地震・火山および関連諸分野の研究
公募締切：2020年10月30日（金）【必着】
採否の決定：客員教員の採否は，本研究所共同利用委員会が決定します．採否の決定は，2021年3月下旬までに行われ，結果を書面により通知します．
応募先：〒113-0032
東京都文京区弥生１−１−１
東京大学地震研究所 研究支援チーム（共同利用担当）
電話 03-5841-1769，5710
※応募に関するお問い合わせは上記へお願いします．
応募書類等詳細は下記を参照してください．
http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/kyodoriyou/visiting_researchers/#tit03

愛媛大学大学院理工学研究科 地球進化学講座・助教（女性限定・テニュアトラック）の公募

募集人員 助教 １名（女性限定）
所属部門 大学院理工学研究科 数理物質科学専攻 地球進化学講座
専門分野 地球表層物質科学
応募資格（１）フィールド実習および実験等の地球科学の専門教育科目を担当できる方（２）優れた研究業績をあげている方 （３）教育や研究活動並びに共同研究に熱意を持って取り組み,大学の運営や社会連携活動にも貢献できる方 （４）博士の学位を有している方（採用予定日までに取得見込の方を含む）（５）会議や授業・学生指導を日本語で対応・実施できる方(国籍は問いません)
担当科目 着任後は，標本や薄片を扱った岩石鉱物学実験，地質野外実習や，地球化学,鉱物・岩石学,または地質学関係の授業等を担当していただく予定．
着任時期 令和３年４月１日以降のなるべく早い時期
公募締切 令和２年11月６日（金）必着
提出先 〒790-8577 松山市文京町２－５
愛媛大学 大学院理工学研究科（理学系）人事委員会委員長 平野 幹
問合せ先 愛媛大学 大学院理工学研究科 数理物質科学専攻 地球進化学コース
コース長 堀 利栄 E-mail: shori@sci.ehime-u.ac.jp
電話：089-927-9644 Fax: 089-927-9550（理学系事務課）
提出書類等公募の詳細は，http://earth.sci.ehime-u.ac.jp/kobo.htmlを参照して下さい．

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します.

笹川科学研究助成募集

【学術研究部門】
・大学院生（修士課程・博士課程）
・35歳以下の任期付き雇用の若手研究者
・ただし、「海に関係する研究」は重点テーマとして支援し、雇用形態は問わない.
・助成額は、1件100万円を限度とする
【実践研究部門】
・学校・NPO職員等に所属している方
・博物館、図書館等の生涯学習施設に所属している学芸員・司書等
・年齢、雇用形態は問わない.
・助成額は、1件50万円を限度とする
申請期間：2020年9月15日（火）～10月15日（木）23：59まで
申請方法：Webからの申請となります．詳細は本会Webサイトをご確認下さい.
https://www.jss.or.jp/ikusei/sasakawa/
＜問い合わせ先＞
公益財団法人日本科学協会　笹川科学研究助成係
TEL：03-6229-5365
URL：https://www.jss.or.jp
E-mail：josei@jss.or.jp

2021年度山田科学振興財団 海外研究援助

趣旨：本事業は，若手・中堅研究者が海外の大学や研究機関等に一定期間（1か月～1年間）滞在して共同研究を実施するために必要な経費を助成し，これによって新しい研究の方向性を見つけた研究者とその研究に興味を持つ海外研究機関等との国際交流を活発化することを目指します．また，個人の研究だけではなく，グループで行う研究も援助の対象とします．※2021年4月1日～2022年3月31日に出発予定の方を対象とします.
以下の4つの申請区分を設けます．該当する申請区分でお申し込みください.
＜個人A＞研究者個人が海外の研究機関を拠点として6か月未満の期間，研究活動を行うための滞在費・渡航費・研究費等，または，研究拠点を海外の研究機関に移すための準備・スタートアップ資金を援助します．援助額は100万円/件を上限とします.
＜個人B＞研究者個人が海外の研究機関を拠点として6カ月～1年間研究活動を行うための滞在費・渡航費・研究費等を援助します．援助額は200万円/件を上限とします.
＜グループA＞国内の研究グループが海外での観測・探索・フィールドワークなどを行うために6か月未満の期間，現地に滞在するための滞在費・渡航費・研究費等を援助します．援助額は100万円/件を上限とします.
＜グループB＞国内の研究グループが共同研究を行う海外研究機関に滞在して6カ月～1年間研究活動を行うために必要な滞在費・渡航費・研究費等を援助します．援助額は200万円/件を上限とします.
採択数は，個人・グループに関わらず，A：4件程度，B：4件程度を予定しています.
応募資格：
1.日本国籍を有する研究者，もしくは日本の研究機関に所属する研究者
2.上記を代表者とする研究グループ
応募締切日：2020年10月31日
問い合わせ，申請書提出先
公益財団法人 山田科学振興財団 事務局
〒544-8666　大阪市生野区巽西1丁目8番1号
電話 (06) 6758-3745（代表）
E-mail：office@yamadazaidan.jp
応募方法等は，ホームページをご参照ください.
https://yamadazaidan.jp/jigyo/kaigai.html

東京大学地震研究所 2021年度共同利用の公募

応募資格：申請，及び研究組織へ参加できるのは，国内外の大学，国・公立研究機関の教員・研究者又はこれに準じる者（名誉教授・大学院学生・財団等民間団体や企業の研究者）とします．※若手研究者の積極的な応募を歓迎いたします.
申請方法：共同利用 HP（http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/kyodoriyou/）にある所定の様式に必要事項を記入のうえ，Web 申請システムを使用し，申請してください.
Web 申請システム：https://erikyodo.confit.atlas.jp/ja
研究期間：2021年4月から2022年3月まで
申請期限：2020年10月30日（金）【厳守】
公募要領の詳細は，HP http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/kyodoriyou/を参照してください.
【各種提出先，問い合わせ先】
〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1
東京大学地震研究所 研究支援チーム（共同利用担当）
電話：03-5841-1769, 5710
FAX：03-5689-4467
E-mail: k-kyodoriyo@eri.u-tokyo.ac.jp

会員の声

深海地形調査技術と南海トロフ・日本海溝のジオダイナミクスの先駆者，トム・ヒルデ教授を偲ぶ

小川勇二郎・岸本清行

Prof. Thomas Wayne Clark Hilde（以下，ヒルデさん）（テキサスA&M大学名誉教授）が，2020年8月1日，大学近郊の街Bryanで亡くなられた．82歳だった．ヒルデさんは，主として太平洋の大洋底，海溝，中央海嶺などでの地球物理的手法を用いた計測にもとづくテクトニクスの分野で研究・教育に活躍したが，日本の海洋底固体地球科学の進展に果たした業績は計り知れない．

ヒルデさんは，1938年ノースダコタ州スタンリー生まれのスポーツマンであった．カリフォルニア州のサンディエゴ州立大学で地質学を学んでいた学部生の時に，カリフォルニア湾での研究航海に参加したことをきっかけに，海洋分野に進んだ．1963年に卒業後，スクリップス海洋研究所で海底地球物理学を中心とした太平洋の海洋研究を始めた．丁度プレートテクトニクス革命が始まる時期であった．海軍海洋局で技官として海洋調査に従事後，台湾国立大学の海洋研究所の設立に参加し，西太平洋の海洋調査を進めたが，特筆すべきは，すでに1960-70年代にマリアナ海溝などを含めて，西太平洋の多くの海溝域の地形を明らかにし，多くの論文を発表したことである．

この間，ヒルデさんは上田誠也教授の指導の元，東京大学地震研究所から学位を取得し，その後文字通り，太平洋をまたぐ懸け橋となって活躍した．タイ国において国連関連の仕事に従事した後，1977年テキサスA&M大学に教授として招かれ，地球科学教室の設立に携わった．ここは，国際深海掘削計画（ODP)の本部が置かれていたことで知られているが，ハンディン，フリードマン両教授らの三軸変形実験室とともに，雑誌Tectonophysicsの編集拠点ともなり，世界のジオダイナミクス研究教育の新しいメッカとなった．

ヒルデさんの最大の功績は，海底地形図と地形映像の技術を統合して，広く太平洋のジオテクトニクスの解明にあてたことである．すなわち，海底三次元サイドスキャンデータの取得を実現した装置（TAMU2；通称タムスクエアド）の開発だ．測深法は「ロープと錘」法，その後の超音波信号（シングルビーム）法（1920年代）に始まり，1980年頃に船底から指向性を持った２次元的な超音波を発信するマルチナロービームスワス測深技術（３次元測深法）へと進化した。超音波で海底の写真様情報を得るサイドスキャン海底マッピング法が別途存在していたが，ヒルデさんらのグループは，この二者を融合し，世界で初めての全水深型の地形観測高機能システムを実現した．それを使い1993年には日米共同研究（リッジフラックス計画）の一環として、南部東太平洋海膨の中軸部周辺を数100 kmにわたって、海底地形および海底面散乱強度図を３次元画像として計測した．これは，その後の深海調査船（しんかい6500など）を利用した研究にも基礎データとして提供され，中央海嶺拡大軸のテクトニクス研究のブレイクスルーをもたらした．

日本周辺海域のジオダイナミクスにとってのヒルデさんの業績は，これにとどまらない．特筆すべきことは以下の二点である．一つは四国沖の南海トロフのスパーカーによる世界最初の海溝付加体の断面である (Hilde et al., 1969, Deep-Sea Research, vol. 16, p. 67-75)．これは南海トロフでのDSDP　Leg31に先立つ業績であり，ヒルデさんのこの研究が契機となって，Site 298, 808が掘削されることとなり，Site 298のサイトレポート(1975年)にも引用されている．当時までは，南海トロフが海洋プレートの沈み込みであるとは知られていなかった．ヒルデさんの断面を見ると，幅30 km程度の間に4つのスラストスタックが明瞭に示されており，ここが正断層境界としながらも，海洋底の更新による変形帯である，と述べている．まさに慧眼というべきだろう（小川, 2010,地学雑誌, v.119, p.153-172参照)．

もう一つは，日本海溝の海陸両側斜面のホルスト・アンド・グラーベン構造（地塁地溝構造）の意義である(Hilde, 1983, Tectonophysics, vol. 99, p. 381-397)．海側の地溝部が陸側斜面の下に潜り込むときに斜面の先端が落ち込み，その結果陸側斜面が後退する，またそれが沈み込み侵食（subduction erosion）と呼ぶプロセスであることを，ヒルデさんは最初に提唱したのである．このことはその後の多くの研究に刺激を与え，日本海溝は典型的な侵食型海溝として知られるようになったが，海溝の後退に関する研究はヒルデさんを嚆矢とする．このようにヒルデさんこそ，北西太平洋，南海トロフと日本海溝のジオダイナミクス研究においても実質的な先駆者であるといえる．

研究室でのヒルデさん．2010年頃．ご家族提供．

ヒルデさんは，持ち前の豪快さと，それでいて親切で親しみやすい人柄により，多くの若手，外国人研究者との交流の中心となった．このころ，日本でも海洋固体地球科学の研究が進展していたが，日本の海洋地球科学関連の研究機関や大学に客員研究員やアドバイザーとして招かれた．そして，多くの若手がある時は航海で指導を受けたり，ある時は陸上研究やシンポジウムなどの共同研究や発表会に招待されたりした．ヒルデさんは，アジアを始めとして，日本人研究者にも気軽に声をかけて下さり，さまざまな国際研究への参加に道を開いて下さった．こうした恩義は忘れることができない．ヒルデさんがいなかったら，今日の日本の海洋固体地球科学研究の隆盛はなかったかもしれない．こうして，ヒルデさんは，海洋研究航海の実質的なリーダとしてだけではなく，国際的な研究全体の雰囲気作りにも大いに活躍した．

ヒルデさんは，来日のたびに大好物のトンカツ屋で若手研究者とともに議論に花を咲かすのを楽しみにしていた．2015年に名誉教授になってからは，コロラドスプリングス近郊のロッキー山脈の林の中の別荘でジオダイナミクスについて若手とともに語り合うという夢を抱いていたが，その実現を前にして他界された．ヒルデさんの海洋地球科学における偉大な業績と遺徳を偲び，ここに心からご冥福を祈ります．

追　悼

名誉会員　諏訪兼位先生を偲ぶ

名誉会員の諏訪兼位先生は，2020年3月15日早朝にご逝去された（享年91歳）．3月13日に入院されるも，14日には元気な様子だったと聞いている．あまりに突然のことであった．

諏訪先生は私の恩師である．先生の弟子の中では私はできの悪い部類に入るが，最後まで暖かく接していただいた．

諏訪先生は1928年に鹿児島市にお生まれになり，旧制鹿児島第一中学校を卒業後，第七高等学校をへて，1951年に東京大学理学部地質学科を卒業された．同年10月には名古屋大学理学部の設立されたばかりの地球科学科に助手として赴任され，1971年に助教授，1983年に教授に昇進された．1988～1990年には名古屋大学理学部長を勤められた．名古屋大学を退官された1992年からは，日本福祉大学経済学部教授，1995～1999年には日本福祉大学情報社会科学部の初代学部長，そして1999～2003年には日本福祉大学の学長を務められた．

また，諏訪先生は日本アフリカ学会会長，日本学術会議委員，日本地質学会評議員，日本岩石鉱物鉱床評議委員などを歴任された．1978年には日本地質学会賞を，2002年には渡邉萬次郎賞（日本岩石鉱物鉱床学会）を受賞されている．

諏訪先生は，東大での学生時代には坪井誠太郎教授に師事された．岩石学が泥臭くも魅力ある学問であることを坪井先生から教えられたと，何度もお話しになられていた．また，いくつかの著作の中にもそのように記述されている．諏訪先生の研究は，坪井先生の研究室で，黒部川周辺での飛騨変成帯の調査から始まった．名古屋大学就任後は，飛騨変成帯とともに領家変成帯での調査を進められ，1962年には，領家変成帯の岩石学的及び地質学的研究で名古屋大学の理学博士の学位を取得された．

そして，何といっても諏訪先生の代名詞的な研究は一連のアフリカをフィールドにしたものである．諏訪先生の最初のアフリカ調査（1962年）は，名古屋大学と名城大学の学生による「独立が相次ぐ新生アフリカをカイロからケープタウンまで自動車で大陸縦断する計画」に端を発したものだったそうだ．諏訪先生はその計画に大学教員として加わり，資金集めに奔走し，規模を縮小するも，ジプチ，エチオペア，スーダン，エジプトの地において，隊を率いて調査を完遂された．この調査旅行で先生が感じられたアフリカでの強い印象は，先生の著者である「裂ける大地アフリカ地溝帯の謎（1997）」や「アフリカ大陸から地球がわかる（2003）」で生き生きと語られている．

その後1968年からは，地質学，岩石学，地質年代学および地球物理の研究者をメンバーとする隊を何度も組織され，本格的かつ広範な調査を実施された．諏訪先生のアフリカ調査は1992年まで，10回にわたって続けられた．カバーされた国は13カ国にもなり，エジプトから南アフリカまでほぼ連続したものになった．

また，諏訪先生は名古屋大学の修士課程の大学院生をケニアのナイロビ大学に留学させる制度を構築された．1972年から1979年まで毎年のように，この制度を利用する学生が現れ，素晴らしいアフリカの自然の中でフィールドワークを約1年間行う経験を得た．私もその恩恵にあずかったひとりである．先生の調査隊とアフリカ滞在が重なった期間は，調査隊に参加させていただき，厳しくも温かい指導を仰いだ．

諏訪先生のアフリカでの研究内容は多岐にわたるが，主に，アフリカ各地に産する斜長岩に関する研究，汎アフリカ造山帯における地質学的・岩石学的研究，アフリカ大地溝帯の火山活動に関する研究，アフリカ大地溝帯内に産出するマントル起源捕獲岩の研究，カーボナタイトおよびキンバライトの岩石学的研究を挙げることができる．

諏訪先生の研究で，もうひとつ忘れてはならないのは，斜長石の光学的研究である．特に斜長石の双晶法式を偏光顕微鏡とユニバーサルステージによって識別する方法を発展させ，それらの双晶法式と岩石の成因との関係性を明らかにされている．1978年の日本地質学会賞はこれらの研究によって受賞されている．偏光顕微鏡は現在でも岩石に記録された情報を読み取る重要な機器であるが，諏訪先生の著書である「偏光顕微鏡と岩石鉱物 第２版（黒田・諏訪, 1983）」は偏光顕微鏡で岩石を観察する上で，なくてはならない教科書になっている．歌人でもある諏訪先生は，自然の中で，人とのふれあいの中で，そして世の中の様々な出来事に際して，心を動かされて次々と短歌を詠まれた（朝日歌壇賞を2度受賞）．先生は偏光顕微鏡下に現れる岩石のミクロの世界をも歌材にして，歌を詠まれている．私が偏光顕微鏡で斜長石を観察するたびに思い出す先生の歌は，前述の教科書の中にも掲載されている．

双晶の　微細反復　華麗なり
生成の謎　あやしく秘めて

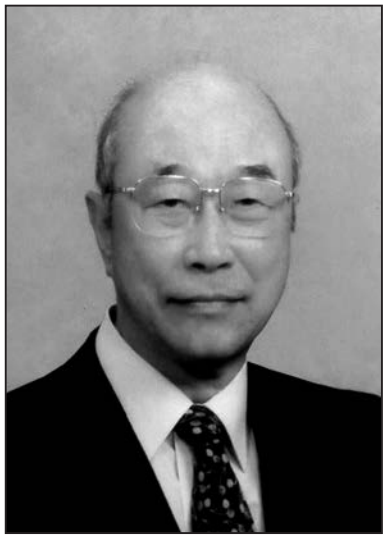
諏訪先生は地球科学の普及にもご尽力された．その意欲は晩年になっても衰えることはなく，85歳を過ぎてから「地球科学の開拓者たち―幕末から東日本大震災まで（2015）」と「岩石はどうしてできたか（2018）」を著わされた．これら2作は，地球科学および岩石学の歴史を綴ったものであるが，研究内容とともに研究者の人物にもスポットがあてられ，主な研究者には諏訪先生自ら描いた肖像画が添えられている．国内外における，諏訪先生からみた先人，恩師，同僚，後輩，子弟の研究者が登場するが，それぞれの研究者に対する愛情と研究成果に対する尊敬がページからにじみ出ている．

名古屋地学会という地方学会がある．かつては，愛知県周辺の地球科学研究者の研究発表の場のひとつであったが，最近では学会の性格も変わり，地学教育の普及に重きをおいたものになっている．2009年からは，諏訪先生は毎年のようにこの学会で講演発表されている．地球科学の発展に足跡を残した研究者を題材にされることが多かった．今年（2020年）の名古屋地学会の講演発表にも当然のようにエントリーされていた．そして，先生から「発表の参考資料を作成したから，当日発表会場で配布してほしい」という手紙が私のもとへ届いたのは，亡くなる3日前のことであった．発表のタイトルは「アフリカ大陸の剛塊と造山帯」であった．

今はただ，諏訪先生のご冥福を祈るばかりである．

（三宅　明）

追　悼



名誉会員　高柳洋吉先生のご逝去を悼む

日本地質学会名誉会員高柳洋吉先生（東北大学名誉教授）が2020年（令和2年）7月21日に逝去された．享年93歳でした．謹んでご冥福をお祈り致します．

高柳先生は1926年に東京府北豊島郡滝野川町大字田端（現東京都北区田端）でお生まれになり，ご父君が東北帝国大学に赴任された1931年に仙台に移られて以来，生涯を仙台で過ごされた．宮城県仙台第二中学校（現仙台二高）および仙台工業専門学校を経て，東北大学理学部地質学古生物学科に進まれ，1950年の卒業と同時に同学理学部助手となられた．1960年に北海道の白亜系蝦夷層群の有孔虫の研究で博士号を取得，1961年9月から一年間招聘研究員としてスタンフォード大学に出張され，さらに数度にわたり共同研究のため渡米された．その後，1971年に助教授，1974年に教授に昇任され，1990年3月に定年退官されて名誉教授になられた．

この間，先生は一貫して有孔虫を軸に研究をされた．そのきっかけは卒業論文「石川縣金澤市附近の地質」で，当時助教授であった浅野　清先生のご指導を受けたことにある．卒業の年に発表された仙台市近郊の鮮新統，竜の口層有孔虫の研究を皮切りとして，対象を北海道から四国にわたる各地に，また，現世から白亜紀にまで拡張された．とくに白亜紀有孔虫の研究は，在外研究の成果により北太平洋の東西両岸地域で展開された．これらの業績により，1965年に日本古生物学会学術奨励金を受賞されている．

白亜系蝦夷層群の研究で浮遊性種も扱われた高柳先生は，当時注目されるようになった第三紀浮遊性有孔虫の研究を大学院学生や共同研究者とともに推進された．その最初の成果が高知県の登層の化石群の記載であり，その中の新種*Globorotalia tosaensis* Takayanagi and Saito, 1962は，のちに更新世の指標種*Globorotalia truncatulinoides*の祖先種と認定された．

1970年代に入り，日本列島の新第三系の層序と国際対比が，放射年代や古地磁気層序とあわせて総合的に検討されるようになると，先生は浮遊性微化石層序グループのリーダーとして，若手の研究促進と発展に尽力されるとともに，国内外で実施された国際会議や各種プロジェクトの中心メンバーとして，その成功に向け大いに貢献された．1980年代前半に発足した科研費の特定研究「海洋の動的変動」では，課題研究「海洋底の第四紀古環境」のプロジェクト・リーダーとして，各種微化石群集と堆積相の解析に底生・浮遊性有孔虫の酸素同位体比層序を組み合わせるとともに，有孔虫群集の数理解析法による古水温の復元法を導入するという，1本の孔井試料としては，それまでにはなかった総合的な研究を実現された．

高柳先生が定年退官なさった1990年は，日本人による有孔虫研究100年にあたった．そこで先生は，わが国における小型有孔虫学・古海洋学分野の研究史を俯瞰すべく，ともに英文の「1890年－1986年に日本の研究者により確立された古生代後の有孔虫のチェックリストと文献目録」（東北大学刊，1987）と「1890年から1989年までの日本の有孔虫研究文献目録」（東北大学理科報告，特別編7号, 1990）をまとめられた．同年秋には仙台で第4回国際底生有孔虫会議が開催され，北海道・沖縄など国内各地での野外巡検も実施された．この会議は過去3回とも欧米で開催されており，極東地域での開催に参加者不足の不安が囁かれていたが，先生は1986年の第3回会議（ジュネーブ）に組織委員長として乗り込んで日本招致を獲得し，さらに，古生代有孔虫を含む国内の全有孔虫研究者の総力を結集する大会に導かれた．その結果，参加者（150名）の半数以上が海外24カ国からの来訪という，文字通りの国際会議となった．

高柳先生は，矢部長克－半澤正四郎－浅野　清と続く東北大学の有孔虫研究の伝統を受け継ぎ，古生物学講座主任として，微古生物，海洋地質，石油地質分野の26名を数える博士論文を指導されるなど，後輩世代の研究者の養成に大きく貢献された．学外では，日本地質学会評議員，日本古生物学会評議員・会長・「化石」編集長，東京地学協会評議員，太平洋新第三紀地域委員会座長，ならびに国際地質科学連合（IUGS）の国際層序委員会（ISC），国際第四紀学連合（INQUA），国際科学会議（ICSU）の海洋研究科学委員会（SCOR），国際深海掘削計画（IODP-ODP），国際地質対比計画（IGCP）などの層序・古海洋学に関連する小委員会または作業部会の委員を務められ，さらにJournal of Foraminiferal Research, Micropaleontology等の編集者として，地質・古生物分野の国際連携に尽力された．このような高柳先生の業績に対して，アメリカのCushman記念有孔虫研究財団からJ. A. Cushman Awardが贈られている．

高柳先生は1990年の定年退官後，新設間もない石巻専修大学の教授に請われたものの，自由な時間を求め，あえて非常勤講師として7年間教壇に立たれ，その間に，地球科学史として興味深い本の翻訳を準備された．「地球科学に革命を起こした船－グローマー・チャレンジャー号」（Hsü K. J.，東海大学出版会，1999），「地質学者アーサー・ホームズ伝－地球の年齢を決めた男」（Lewis, C.，古今書院，2003），「恐竜を追った人びと－ダーウィンへの道を開いた化石研究者たち」（McGowan, C.，古今書院，2004）の3冊である．

その後は，悠々自適に，もっぱら趣味の読書三昧の日々を送られ，文芸誌，芸術誌なども定期購読されておられた．また，お酒が大好きで，とりわけ大勢での談笑を好まれ，学会の懇親会や記念の集まり，同窓会など，機会があるたびに出かけられた．しかし晩年になって耳がご不自由になるにつれ，楽しみが得られなくなったと嘆いておられた．とはいえ，少人数での花見・暑気払い・忘年会などには参加されたが，それも昨年の忘年会が最後となった．先生は，運動が不得手のご様子であったが，常に姿勢が良く，健康には常に気をつけておられた．退官前は，朝夕の研究室のある6階までの昇降に必ず階段を使われた．晩年は仙台市の体操教室にご夫妻で毎週通われ，コロナ禍で中止になるまで継続された．6月にお宅をお訪ねした際も，弱気な言葉も出るものの，お元気そうなご様子であった．

先生は，亡くなられる2日前まで食欲もおありだったそうですが，急に体調を崩され，21日未明，ご家族に見守られて静かに息を引き取られました．

（長谷川四郎）

追　悼

名誉会員　斎藤常正さんを偲ぶ

20世紀まで欧米の後塵を拝してきた日本の地質学を，対等に渉り合えるまで導いた立役者であった斎藤常正名誉会員が，2020年8月1日に逝去された．

斎藤さんの地質学研究は，東北大学理学部地質学古生物学教室卒業研究として行った，東北日本脊梁地域の野外調査から始まった．卒業研究では，野外調査で確立した岩相層序をまとめ，周辺地域との対比，そして地質年代の検討，構造発達史をまとめるのが定番であった．隣県の地層との対比もままならないのに，欧米の層序に基づき命名された地質年代を検討するには，日本列島から隔絶している欧米の地質時代模式層まで対比しなければならず，夢のまた夢であった．欧米との隔絶によって地質年代の決定もできず，地質学的真理に立ち向かえないことに絶望して，「地質学者は歩く“足”である」などと自嘲していたものである．

体調を崩され郷里の山形で病気療養中の斎藤さんは，持ち込んだBolliとBlowによるVenezuela油田の浮遊性有孔虫についての論文に接して，欧米との隔絶感に一筋の光明を与えてくれるのが浮遊性有孔虫であることを直感，その後浮遊性有孔虫研究に邁進されたことは，教室の伝説として語り継がれている．

有孔虫化石を岩石から取り出す硫酸曹達処理と回転粉砕器Roller Millを使用する岩石の分解法を確立するとともに，日本列島において最適な地域として静岡県掛川地域を選定された．地球の裏側のCaribbean海域の浮遊性有孔虫化石層序が日本列島にも適用できることを修士論文に，適応範囲を日本全域に広げて博士論文とされた．

斎藤さんが博士号を取得した1963年春，筆者は教室に進学し，Colombia大学のpost Doctor研究員として渡米前の6月に，大年寺の苺園で送別会を兼ねて開催された苺会に参加することができた．渡米の際には，手持ちの株を売却して渡航費用に充てたとの逸話には米国人も驚いたそうである．

Lamont Doherty地質学研究所で斎藤さんは，地球最古の海底発見を目指すEwing所長の航海に浮遊性有孔虫層序専門家として乗船された．日本で研究した新第三紀と古第三紀から白亜紀へと年代範囲を拡大し，調査船に引き上げられる試料の年代を決定した．調査航海では乗船研究員の数が制限されるため，我々が論文で馴染み深かった有孔虫研究者を押しのけ，全ての浮遊性有孔虫年代層序を扱える斎籐さんが活躍されたことは，我々後輩の大きな励みになった．

1968年に米国で開始された深海底堆積物を掘削する深海掘削計画Deep Sea Drilling Projectで，斎藤さんは1968年12月1日から1969年1月28日のLeg3に乗船された．

化石層序学者は，一般に化石層序区分に示準化石種名を付した化石帯を使用する．化石種名はその化石の専門家以外の研究者には覚えきれない．同乗の地球物理学者や掘削技術者にも理解できるように斎藤さんは，化石帯について推定されている絶対年代をCore Deckの黒板に書き出したそうである．海底面からの掘削によって回収される堆積物の年代が，次第に古くなる様子が乗船者全員に明瞭に示されたことから，「Mass Spectrometer質量分析計」と徒名されていたとの噂が日本まで届いた．乗船者全員が黒板に書き出される斎藤さんの年代に一喜一憂したことであろう．そして南大西洋の大西洋中央海嶺から離れるに従って，海洋玄武岩直上の浮遊性有孔虫化石年代が古くなるという海洋底拡大説を直接証明したのであった．

この成果は1969年の米国地質学会講演会において大講堂を埋め尽くす聴衆の前で発表され，当時構築途上であった「Plate Tectonics」の根幹である「海洋底拡大説」を直接証明するものとして，地球科学の大革命を不動のものとした．深海掘削は，1975年から日本も参加する国際海洋掘削計画IPODに発展し，掘削船JOIDES Resolution号の日本への乗船枠も定常的に確保され，日本からも多くの乗船経験者を輩出した．日本地球惑星科学連合の設立，掘削船「地球」の建造そして統合国際海洋掘削計画IODPの推進へと，斎藤さんの成果は日本を世界の表舞台に登場させるための出発点となる偉大な一歩であった．

その後，米国では最終氷期の気候復元を目的とする「CLIMAP計画」が推進された．多くの研究者が多数の海底堆積物中の浮遊性微化石群集組成を分担して求め，電子計算機によって海水温を算出する手法が用いられた．化石群集を構成する種の分類の統一が求められ，新たな分類学的検討が敬遠される中，斎藤さんは分類学的研究を継続され，成果を発表しておられた．地球科学の健全な発展のためには，研究者自らの信念に基づく研究を継続することが重要であることを痛感させられた．

斎藤さんが兼務されていたNew YorkのAmerican自然史博物館は，訪米者にとって是非とも見学したい名所で，日本から訪れる多くの方々を斎藤さんはお世話された．post Doctor研究員として南加大学に滞米していた1978年冬の東海岸訪問の際にも大歓迎して下さり，奥様ご自慢の手料理でもてなして頂いた．Lamont Doherty研究所の研究者との討論，博物館の見学など盛り沢山の計画を準備して下さった．人見知りの始まった私の娘は，乗車していた車から筆者が抱き降ろそうとすると泣くので小児虐待と間違われるのではないかと心配していたが，温和な斎藤さんに抱き降ろされても泣かなかったことは，我が家の語り草となっている．

1974年にKielで開催されたPlanktonic Conferenceで，日本からの参加者と日本語で地質学や古生物学について語り合った時，「やはり日本語で思い切り議論できるのはいいな」と話され．米国の第一線で活躍されても英語に苦労されていることが察せられた．

山形大学に地球科学科が創立され，1977年教授に着任された．1979-1981年にIndonesia，1984-1985年にNew Zealandの微化石古地磁気層序探査計画を進められ同行した．現地調査では「学部3年の野外実習をやらされている様だ」と笑いながらも試料採取地点のRoute Map作成を分担された．

地質学会では1987-1998年に評議員を務められた．それまで増加していた会員数が減少に転じ，従来の学会運営を転換する時期だったが，高い見識と機転に加えhumorを交えて評議員会の議論を収められ，現在の地質学会の基礎を築かれた，

21世紀を迎えるに当たり，地質学論集「21世紀を担う地質学」に「海洋掘削によるPlate Tectonicsの証明」を寄稿頂いた．当時「反Plate Tectonics」を掲げる会員もいる中，斎藤さんを「化石層序学によるPlate Tectonicsの証明」による地質学会賞に推薦したところ無事承認され，世界に日本地質学会の地球科学を先導する見識を示すことができた．1990年東北大学理学部教授，1997年同名誉教授．1978-2003年学術会議委員，2006年に地質学会名誉会員，2016年日本地球惑星科学連合Fellowとなられている．生前の偉業に感謝し，謹しんでご冥福をお祈りいたします．

（新妻信明）

National Institute for Youth Education 独立行政法人 国立青少年教育振興機構
「子どもゆめ基金助成活動」 体験の風をおこそう

この教材は、平成29年度子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の助成金の交付を受けて、一般社団法人日本地質学会が作成したものです。

一般社団法人日本地質学会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町 2-8-15　井桁ビル
TEL：03-5823-1150　問合せ：main@geosociety.jp

※非営利目的の青少年教育活動で使用する場合にはご連絡ください。

学　会　記　事

2020年度第3回執行理事会議事録

期日:2020年8月1日（土）13:00～18:00【WEB会議】
出席者：磯崎会長・佐々木副会長・平田副会長・中澤常務・岡田・大藤・亀高・緒方・坂口・小宮・松田・星・辻森・矢部・高嶋・狩野
事務局 澤木
欠席者（委任状提出あり，カッコ内は委任者）：ウォリス
＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者＊＊名，委任状＊＊名，合計＊＊名の出席
＊前回議事録（20-2回）の確定.

Ⅰ　審議事項

1. 地質標準化委員会の新設と委員会メンバー（中澤）
地質基準委員会および地層名委員会を発展的解消し，標記委員会を新設することを次回理事会で提案する.
2. 理事会規則改正の提案ほか（中澤）
下記について，次回理事会に改正案を提案する.
・新設の地質標準化委員会に加え，専門部会における表彰制度に関わる条項を追加する.
3. 理事会規則以外にも，専門部会から表彰に関わる規則が提案される予定．また，専門部会・支部例会における表彰結果については，現在の学会各賞と同様に学会HPで公表することを検討する.
4. 各賞選考委員会規則改正の提案（磯崎会長）
前回執行理事会で説明済みのため，理事会提案予定の資料の確認を行った．次回理事会で提案する.
5. 地質学雑誌投稿編集出版規則改正の提案（大藤）
・誤字や文献欄の書式，非会員から原稿受付に関わる箇所等の改正案が提示された．次回理事会で提案する.
・Data sharing policyを地質学雑誌に表示することを検討する(Island ArcはLevel 1を表明)．学会として統一した方針をとることが望ましいため，Island Arcとも協議して検討を進める（継続審議）.
6. 組織再編に伴う委員会体制について（佐々木）
・7/11理事会での委員承認後の組織，委員名をHPに掲載していただいた．迅速な対応をしてくださった広報委員会に感謝申し上げる.
・業務委員会，理事会の下の委員会の動向を確実に把握するために，各委員会の担当執行理事は，毎回の執行理事会議事次第に各委員会の動向や状況を必ず報告・記載する（ない場合は，その旨を報告・記載する）ことを提案する.
・「地質学者に答えてもらおう」は受付を一時停止していたが，小宮理事が窓口を担当し，質問受付を再開することとした.
6. 地質学雑誌・ニュース誌等のバックナンバー（BN）配布に関する在庫無しオンデマンド印刷化（都度レーザープリンタ印刷）への移行について（緒方）
現状無料であった印刷所倉庫使用料が来年1月以降発生することになり，今後大量かつ長期間のBNの保管を避けるため，毎月の印刷部数を抑えることとした．BNが必要な際は印刷所が無料でオンデマンド印刷で対応することとなる．ただしジオルジュについては，グラフィカルな紙面を重要視することから，オンデマンドではなく現状通りの部数を本印刷（オフセット印刷）し，学会事務局で在庫保管を行う.
7. 学術大会シンポジウムのあり方について（星）
12月の理事会までに来年名古屋大会シンポジウムの方向性を確定するため，継続審議中.
8. コロナ渦での地質学教育に関するサイバーシンポジウム（仮題）（星）
星理事より標記シンポジウムの提案があり，開催を承認した．本シンポも学術大会代替企画の一部として実施する．具体的には，9月下旬に，大学・高校・博物館等での実施事例紹介を行う．YouTubeでのライブ配信を予定.
9. 学会表彰制度の見直しについて（磯崎会長）
来年総会での制度改正を目指して継続審議中．主な意見は以下の通り：小澤・柵山賞の年齢制限を学位取得後5年以内として若手向けの賞としたらでどうか？／小藤文次郎賞の内容変更はしない方がよいのではないか？／毎年の受賞可能者上限数を構成員の一定比率にしたらどうか？／選ばれなかった場合でも評価が高ければ次回も評価対象としたらどうか？／選考委員が決まった人数を必ず推薦をアレンジしたらどうか？／年齢制限ではなく，学位を取ってからの年数としたらどうか？
10. 理事会審議事項の確認
①理事会規則改正（中澤）
②各賞選考委員会規則改正（磯崎会長）
③地質標準化委員会の新設と委員会メンバー（中澤）
④地質学雑誌投稿編集出版規則改正（大藤）
⑤その他

Ⅱ　報告事項

1. 全体的報告
・2020年度役員変更に伴う法人登記が7/28付で完了した.
・構造地質部会より部会での研究集会開催と部会からの「学生発表賞（仮）」授与の企画提案があった．理事会への開催報告と名称に「学術大会」の使用は避けることをお願いし了承した.「学生発表賞」については専門部会で賞に関する規則を作成することとし，合わせて理事会規則の文言も整備する.
・名古屋大会の代替企画について（状況報告）
①表彰・記念講演（星）：9月13日 14:00開始2時間程度．オンラインで実施．受賞者から挨拶ビデオをあつめ，会長－事務局－行事委員長のzoom会議をYoutubeライブ配信することを検討.
②ショートコース（星）：現行の謝金細則に準じて講師謝金を再検討した．ニュース誌7月号より参加募集の広報を開始した．申込受付期間： 第1回分8/5～9/7（月）/第2回分 9月下旬～10/12（月）.
③支部単位の学術発表会（平田）：構造地質部会からの提案を参考事例にして，専門部会にも部会単位での実施を依頼することとした．経費は本部から補助する.
④JABEEシンポ代替企画としてのオンラインシンポジウム（佐々木）：メール審議で検討し，7/30の委員会（WEB会議）でさらに検討した．2月末～3月上旬の土日での実施を予定しており，zoom講演をYoutubeライブ配信を検討中.
⑤ジュニアセッション（デジタルポスター）（高嶋）：募集要項を確定し，参加募集を開始した（9/30締切）．また過去の参加校への案内や学会HP，ニュース誌での広報を開始した．JGNに広報協力を依頼したらどうか．zoomによるショートトークなど双方向のやり取りの必要性など意見があった．地学教育委員会で検討して進める.
⑥地質系若者のためのキャリアビジョン誌（坂口）：8社の掲載が確定．さらに掲載企業を増やすべく賛助会員含め関連企業への宣伝チラシの送付を行う．なおショートコースの企業向けポイント（Web地質学講義，CPD8単位）をアピールしたチラシも同封する.
2. 運営財政部会：総務委員会（緒方・亀高）
＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞
・地盤技術フォーラム2021（2021/2/17-2/19；東京ビックサイト）から協賛名義使用申請があり，承認した.
・Techno-Ocean 2020（地質学会協賛：10月神戸開催予定）の開催延期の連絡があった．延期後の日程は未定.
・2020年度藤原ナチュラルヒストリー振興財団学術研究助成（動物学）応募（9/1）→【HP，メルマガ掲載】
＜会員＞
1）今月の入会者（1名）：正会員（1名）：中川　渉
2）今月の退会者（2名）：正会員（2名）：藏永 萌・萩原 茂雄
3）今月の逝去者（1名）：名誉会員（1名）高柳洋吉（7月21日逝去）
4）2020年 7 月末会員数：賛助：27，名誉：44，正会員：3368［内訳 正会員：3284，正（院割）会員：82，正（学部割）会員：2］合計　3439（昨年比-160）

＜会計＞
・自然史学会連合より2020年度分の分担金（20000円/年）の納入依頼があった．例年通り納入予定．
＜その他＞
・事務局の会員管理システムのクラウド化を検討中．またテレワーク導入に合わせた就業規則の変更を検討している．
3. 広報部会：広報委員会（坂口・小宮）
・会員の出演TV番組の紹介依頼があり，会員自身の活動紹介として，学会HPに掲載した．内容に関する責任は会員個人にあることを前提に，今後会員から自身の活動（学術・教育・社会貢献活動）の広報を依頼された際は，同様に対応する．
4. 学術研究部会（辻森・ウォリス・星）
1）行事委員会（星）
・名古屋大会の代替企画について（→全体報告へ）
2）専門部会連絡委員会（辻森）
特になし
3）国際交流委員会（ウォリス）
・モンゴル地質学会へMOU更新のため書面を7/22に発送した（7/31到着済）．
4）その他
特になし
5. 編集出版部会（大藤・狩野）
1）地質学雑誌編集委員会(大藤)
（1）編集状況報告（7月31日現在）
・2020年投稿論文：41［内訳］論説19（和文18・英文1），レター6（和文6），総説1（和文1），ノート3（和文2，英文1），報告3（和文3），口絵1（英文1），巡検案内書8 査読中：33，受理済み：21（うち特集号9，案内書2）
・126巻7月号（名古屋巡検案内書）：案内書4編（約60頁，7/31発送済み）
・126巻8月号：特集号「法地質学の進歩」（世話人：杉田律子）6篇（約50頁，入稿準備中）
（2）投稿編集出版規則の改正案（→審議事項へ）
2）アイランドアーク編集委員会(狩野)
（1）編集状況
・狩野編集委員長より直近１ヶ月の投稿数が伸び悩んでいる状況が報告された．また，現在進行中の特集号への投稿も推進する必要がある．
3）企画出版委員会（小宮）
特になし
6. 社会貢献部会（松田・矢部・高嶋）
1）地学教育委員会（高嶋）
・ジュニアセッションについて（→全体報告へ）
2）地質技術者教育委員会（佐々木）
・JABEEシンポ代替企画としてのオンラインシンポジウムについて（→全体報告へ）
・7/17の地球・資源分野運営委員会（WEB会議）に，本委員会の佐々木副委員長，金川委員，竹内委員が出席．7/30の委員会で報告・検討を行った．
3）生涯教育委員会（矢部）
・7月18日に第1回会議（Web）を実施した．
・無期延期としていた今年度の街中ジオ散歩については近々改めて検討する予定．
・来年の世界鉱物年にあわせて，地質学会として関連イベント等を検討してはとの意見があった．今後委員会で検討する．
4）その他
特になし
7. ジオパーク支援委員会（平田）
・「（仮称）日本ジオパーク地球科学評価機構」（コンソーシアム）の設置事前相談会議（7/20，WEB会議）への出席依頼があり，平田副会長が出席した．相談会議では，コンソーシアムの役割や幅広い業務内容などについて意見が交わされたとのこと．
8. 地学オリンピック支援委員会（高嶋）
・2020年国際地学オリンピック（ロシア大会）中止に伴い，代表選抜（第12回日本地学オリンピック本選）も中止となっている．
・第12回日本地学オリンピック予選（2019年12月実施）問題の講評を提出した．
9. 地質災害委員会（松田）
・防災学術連携体「令和2年7月豪雨の緊急集会」（7/15実況中継）が開催され，地質学会からの話題提供として，「地質学的見地からみた熊本県南部における令和2年7月豪雨災害」（斎藤 眞，鳥井真之）の発表があった．
・「令和2年7月豪雨」についての会長談話を準備中（8/4HP，メルマガ掲載）．

以上

2020年8月11日
一般社団法人日本地質学会執行理事会
会長（代表理事）磯崎行雄
署名人　執行理事　中澤　努

表紙紹介

第11回惑星地球フォトコンテスト入選作品
混成の美

写真：**辻森　樹**（宮城県）

撮影場所：ロシア・カレリア共和国

撮影者より / 地質的背景：露カレリア共和国の見事なミグマタイト（混成岩）の露頭写真です．巡検中に撮影しました．太古代の大陸地殻の部分溶融の現場がそのまま固まった白（優白部）と黒（優黒部）がはっきりした大露頭は美しく，教育的です．驚くべきことに，この露頭も含め，この地域一帯は古原生代の大陸衝突でエクロジャイト相の深さまで沈み込んでおり，優黒部の一部には角閃岩化を免れたエクロジャイトが残っています．

審査委員長講評：よく調査されている，あるいは話題となっている地層や岩体を案内人が解説してくれるのが巡検で，地質を深く理解するのに役立ちます．特に海外の巡検では，1人では簡単に行けない場所まで案内してくれることもあるので助かります．巡検では限られた時間で撮影しなければなりませんが，辻森さんはそのチャンスを見事にものにされました（白尾元理）．

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003年9月19日　日本地質学会総会制定
2009年12月5日　一般社団法人日本地質学会制定*

日本地質学会の会員は，科学的真理を明らかにする事を目的として，誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う．その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り，もって社会の発展と人類の福祉に貢献する．会員は，基本的人権を守り，良識かつ品位のある行動をとる．

1. 科学者としての倫理：会員は，専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る．研究と調査においては，法を尊守し，社会的良識に従って行動する．科学的事実に対しては常に謙虚，誠実でなくてはならない．研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し，公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する．

2. 知的交流の確保：会員は，国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに，研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める．

3. 人類と社会への責務：会員は，その専門知識と技術を適切に活用し，研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する．

4. 地球環境への責務：会員は，地球システムの諸現象についての専門家として，地質災害の予知と防止，地球環境の将来予測，資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに，専門知識を活かして環境の保全と改善に努める．自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する．

5. 次世代への責務：会員は，地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展，次世代を支える人材の育成を図る．研究や調査の成果物，重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める．

*2009 年12月5日法人理事会において，一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定.

一般社団法人日本地質学会行動規範

2011年9月8日　一般社団法人日本地質学会理事会制定

日本地質学会が他機関や組織との連携事業を実施する際に，学会員の立場や責任について，学会員ならびに社会に明示するため，一定の規範が必要であるとの認識のもとに，本会倫理綱領を踏まえて行動規範を定めるものである．

（透明性，説明責任）
1. 会員は，地質学・地球科学分野の進展とその成果が与える社会的影響を自覚し，公益性の観点から客観的事実を明らかにするよう努力すると同時に，事実を社会に周知するよう努力する．
2. 会員は,専門の業務において,その目的・方法・成果等について,要求された場合には明快に説明する責任がある．特に専門家でない者には,相手の立場に立つ姿勢で分かりやすく説明する責任がある．

（自立・公益性）
3. 会員は，立案，計画，申請，実施，報告などの過程において，真実に基づき，公正であることを重視し，誠実に行動する．研究・調査データの記録保存や厳正な取扱いを徹底し，ねつ造，改ざん，盗用などの不正行為をなさず，加担しない．また，科学技術に関わる問題に対して，特定の権威・組織・利益によらない中立的・客観的な立場から討議し，責任をもって結論を導き，実行する．
4. 会員は，関与する計画と事業が人類社会や環境に及ぼす影響を予測評価する努力を怠らず，公衆の安全，健康，福祉を損なう，または環境を破壊する可能性がある場合には，中立性，客観性を保ち，自己の良心と信念に従って情報を公開する．

（中立公正）
5. 会員は，人種，性，年齢，地位，所属，思想・宗教などによって個人を差別せず，個人の人権と人格を尊重する．また，個人の自由を尊重し，公平に対応する．
6. 会員は,専門知識を説明するときは,一方的な価値観を押し付けることのないよう，他者の理解を得るように努める．
7. 会員は，他者と互いの能力の向上に努力し，専門上の批判には謙虚に耳を傾け，不公正な競争を排除する．

（契約に対する誠実性と利益相反）
8. 会員は，雇用者または依頼者それぞれのために，誠実な代理人または受託者として行動する．
9. 会員は，雇用者または依頼者から不適切な便宜供与を受けてはいけない．
10. 事業の結果および研究の成果が他団体または，自らを含む特定の個人に利益をもたらすことが予想される場合には，事前に雇用者あるいは依頼者の了承を得る．

以上

©一般社団法人日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp